## 雪山

湯守たに里にくたるを白山の雪ふみわけて登る人あり　熊本　武藤かきは

### 踏雪

足のあと深く残して雪の朝水くみにゆく山の一家　愛知　服部桂

### 行路雪

雪はまた深からぬらし山里の柴うるをとめ今日も來にけり　新潟　和田茂幹

### 冬風

ふる雪を横にふきしき久方の月山おろし身にそしみける　山形　大山太次郎

北山の雪ふきおろす風ならむねやさへ寒き冬の夜半哉　愛媛　浦尾惟正

淋しくも枯野にたてる一つ松折れよと許り冬の風ふく　三重　辻正八

木葉みな散らしつくして吹く風の松に集る夜半そ淋しき　岡山　甲賀新八

朝きたの寒くもあるかな比叡愛宕山はくもりて雪の降るらし　大阪　小澤包子

### 木枯

むらしくれ見るまに晴れて木枯の音のみのこる峰の松原　茨城　永長福美

散りしけるおちはをまたも吹き上て木枯すさふ山かけの庭　大阪　岩井健之丞

夜もすから吹く木枯の音さむし哀れ宿なき人はいつこに　滋賀　津田静江

木枯の風の姿をそのまゝに枯しすゝきの波にみるかな　愛媛　前谷喜久子

木枯の名残りの波に海荒れてましかく見ゆる富士の雪のね　千葉　橋本宗次郎

### 夜嵐

吹きすさふ嵐の音に幾度かいそくよなへの手をとゝめけむ　京都　山岡喜美子

夜風寒

月影も氷る霜夜に燒跡のかりやゆすりて木枯のふく　神奈川　林せき子

夕木枯　熊本　内田乙女

散りはてし梢にかゝる夕月の影そあやふき木枯のかせ

杜の木枯　兵庫　佃幸子

うふすなの杜のみたらしうつむまて落葉ちりしく木枯のかせ

久方の月に落葉のとゝくまてふきあけにけり杜の木枯　岩手　坂上樹

枯野風　高知　土井原忠家

すまひ草かれ〳〵殘る冬の野に力つよくも風すさふなり

街木枯　京都　平川三郎八

電の火影も凍る心地して巷に冴ゆる夜半のこからし

夜木枯　同　都築平次郎

木兎の月にうそふく影見えて木枯すさふうふすなの杜



寒風

朝きたの枯木をなふる畷道顏をそむけて學ひ子のゆく　兵庫　松谷庄藏

嵐

ましらなく聲も交りて嵐ふく夜はものすこし山住の庵　奈良　吉田しか子

落葉

谷は皆落葉うつめぬ丸木橋かゝる所や流れなるらむ　鹿兒島　蕨野盛夫

掃よせてたけはえならぬ薫ありなにの落葉の名殘りなるらむ　山口　中島光子

時雨ふる音かときけは山まとの風にみたるゝ木の葉なりけり　福岡　永田政吉

學ひやのかへさなるらん今日も又落葉かく子ら山に入り來ぬ　山口　紀藤まき子

手に取りてまた眺めけりちりしきし紅葉に交る珍らしき葉を　同　國廣八助

朝夕の飯を炊きてあまりあり散りしく落葉たきゝにはして　同　西村常子

苦むせる上に落葉の重なりてふむ音深し山かけの庵　山形　菊地秀言

吉田にて

初冬の富士の裾野の夕風にをのゝく落葉まひつをとりつ　静岡　小薬勢伊子

晩落葉

木枯やいたくふきけむ曉におきいて見れは木の葉ちりしく　岡山　正木義仁

夜落葉

夜廻りの足音あやし霜に散るかとの落葉や深くなりけん　朝鮮　濱島義一

木枯は星の林にすさふらし夜ふけて庭に木の葉ふりくる　長崎　横尾英延

水に映る月影けちて上野より落葉ちりうくしのはすの池　東京　務川眞佐榮



深夜落葉

夜をさむみ甘酒うりのをちかたつ辻の落葉を風のうつまく　神奈川　日高數子

庭落葉

法の師かくさめを森にひゝかせて庭の落葉を一人あつむる　奈良　植山儀吉

野落葉

百舌なきし野中の林落葉してあらはに見ゆる小田のわらやね　東京　藁科松伯

川落葉

たきり落ちて水泡逆巻く瀧つ瀬を浮きつ沈みつ木の葉流るゝ　静岡　佐野やゑ子

社頭落葉

廣前の木々の木の葉の散りはてゝ鳥居高くもあらはれにけり　和歌山　赤松豐治

落葉さむし

朝からすなく聲寒し北風に落葉ちりかふ霜のなはて路　東京　安原たか子

はたか木となりし梢も寒けなり落葉ちりしく山里の庭　同　渡部節子

落葉風に亂る

草葺の屋根にたまりし紅葉はの風に亂れて又空にまふ　岐阜　澁谷玉惠

冬　山

くれて行く冬を飾りてはたか木に花をつけたる雪のむら山　宮城　館内孝十郎

あら鷲のかゝなく聲のきこえきて吹雪にくるゝ越の高山　愛媛　下司安吉

若人のすへりきそひにふさはしく雪ふり積る冬の山里　靜岡　飯田耕一郎

冬　枯山

狼のほゆるにも似て冬深き山の木枯ものすごきかな　三重　成田三郎

はたか木にとまる小鳥のかけ寒し嵐のゆすする冬枯の山　東京　内之浦三雄

寒　月

嫁入の人々つゝく道霜に月かけ凍る自動車の窓　福岡　長主禎子



はたか木の梢寒けに見えるかな霜にこほれる月の光りは　靜岡　井上たけい

霜白き道にうつらふはたか木のかけすら寒き冬の夜の月　福岡　山川敬行

ふせやにも玉を連ねしことくなり軒のつゝらに月のかゝりて　千葉　松原翁馬

凍　月

はたか木にかゝれる月のかけ寒し綿入衣かさねきつれと　長野　西尾直治郎

冬　月

電車まつ都大路のよるさむしかなちに白く月はこほりて　宮城　小林こきん

軒近き木の葉をはらふ山風のふく音さむき冬の夜の月　兵庫　有永常子

木枯の物凄きまて大空にふきさらしたる冬の夜の月　東京　堤義勇

霜凍る火の見やぐらの空高くさえこそ渡れ冬のよの月　兵庫　内藤榮昭

木枯のすさぶ廣野に霜みえてこぼる許りにさゆる月かげ　山口　柏村喜久子

ひるの間の吹雪ははれて梅か枝にとかまの如き月そかゝれる　京都　福井とよ子

雪つもる軒のつゝらのきらめきて影ものすごき冬の月哉　千葉　關野義三郎

うら枯し川そひ柳やせてたつ哀れをそふる冬の夜の月　福島　慶德政子

はたか木の影も淋しく見ゆるかな霜より白き月の照らして　千葉　山田詠一

ときあけし刀のことくすさまじき白玉山の冬の夜の月　鹿兒島　種子田秀實



江月寒　三重　犬飼瞻法

夜そはうる鈴の音ほそき町はつれ江川の月のかけそさえたる　群馬　須藤注連吉

ひかりさへ氷りて寒し風すさむ田中の杜にかゝる三日月　岡山　小寺靜枝

森冬月

とかりせし人は歸りて冬枯の森にかゝれる片割の月　奈良　上田正俊

寒山月

山の端の月かけさむき冬の夜に聲もくもりてふくろうの鳴く　長野　河野金四郎

寒夜月

駒か峰の雪に光りのてりはえてさむさ身にしむ夜半の月かな　千葉　長岡熊雄

窓寒月

北風を月の聲かと思ふまてさゆる光りの寒き窓かな　同　飯塚幸一郎

里寒月

小夜更けておく霜深き山里をてらす月影さむくもある哉

冬夜

よまはりの木の音さえて月凍る日の見やくらを木枯のふく　東京　織田みを子

寒夜

夜を寒み子等に重ねるあつふすまかくして我も育くまれけん　福井　眞田一夫

大路ゆく人の足音たえはてゝ窓もる風も凍る夜半かな　京都　市田富藏

たえかねてゆかの下にも焚火するくたらの夜の寒さをそ思ふ　朝鮮　岡テウ子

たえかたき寒さにふしと凍るらむ更けゆく夜半に水鳥のなく　愛知　小畠承範

山寺の法の集ひのかへり道吹雪となりし夜の寒さかな　福岡　西川績子

冬夜寒

星一つ雪氣の雲のきれ間よりもれてきらめく夜半の寒けさ　山口　末田三枝

寒夜燈火

雪にくむ酒のうまさに更くるまで一人樂しむ燈火のかけ　群馬　土屋元次

時雨

庭に干す籾のむしろをとりこめはやかて晴れゆく村時雨かな　奈良　大倉恭助

時雨して北風寒き冬の日をことそともなく學ひ子のゆく　和歌山　片山昌一

神無月落葉ましりに降る雨の音きくさへに淋しかりけり　秋田　堀米子

とまり舟かしく夕餉のうす烟しくれて寒き濱川の岸　愛媛　石丸菅郷

山時雨

都人もみちかさして歸りくる箱根の山路時雨ふりしく　東京　角田傳

谷時雨

柴負ひて谷間を出る杣人をかくしあらはしふる時雨かな　東京　植栗照彦

あかす見し谷の紅葉もちりそめて吹く風寒く時雨ふるなり　三重　津賀舜山

峰おろす風に木の葉を拂はせて谷間にそゝく村時雨かな　神奈川　井上金治郎

行路時雨

みのつけて野路ゆく人の影寒しはれみくもりみ時雨ふりさて　兵庫　植松義太郎

月前時雨

くもるかとあふけははれて冬の夜の月てる庭に時雨ふるなり　岡山　中山寛

里時雨

たちのぼるわら火の烟したはひて時雨になりぬ山本の里　朝鮮　杉本一

田家時雨

もすのなく聲も淋しき小山田の賤か垣根に時雨ふるなり　鹿兒島　本田親清

田時雨

神無月時雨の雲のいくたひか稻かる人の袖ぬらすらん　埼玉　石川なみ子

森時雨

ふきおろすひえ山風にさそはれて高雄の紅葉さとにしくるゝ　兵庫　小野蓮子

夜時雨

神無月外山の月はさえなから庭の落葉に時雨ふるなり　山口　池田總子

朝時雨

御野立の岡は朝日の輝きて片山林しくれふるなり　佐賀　於保謙孜

冬雨

藪柑子あかき垣根に小雀のぬれて餌あさる雨の夕くれ　福岡　岡澤麟太郎

冬松

夕からすさわきし聲もしつまりて三日月寒き峰の松原　長崎　阿比留信子

日の光りつゝめる雲の色寒しからすなきたつ野路の松原　大阪　戸田熊子

寒松

名をとけし老武者めきて見ゆるかな吹雪にたてる古塚の松　高知　近澤武男

吹きおろす風の寒さにをたけひの聲物すこし峰の老松　和歌山　森　くす子

冬庭松　東京　阿部復馬

木枯に庭の紅葉はちりはてゝひときは目立つ松の一本

寒山松　北海道　豐福常三郎

冬枯の木々に交りてむかつをに一本高くたてるえぞ松　神奈川　專修信立

谷川もけさの寒さに凍りつゝ峰の松風ひとり音する　兵庫　竹下悅一郎

木枯に木々の葉は皆散りはてゝ松はかりにもなれる山哉　東京　熊井理總

冬枯の木立の中に色かへぬみとりの目立つ峰の松かな　神奈川　宍戸與三郎

山枯て一入色を深めけり寒さも松のくすりなるらん

歳暮松　群馬　井上嘉重郎

花紅葉ちりて雪ふるとしの暮市にうらるゝ松あはれなり　熊本　堤光次郎

雪中松

さえ〳〵し夜半の嵐は埋れて雪にしつけき峰の松原　秋田　高根來助

冬松

つりなはを松か枝ことにかけてけり積らは積れ庭の白雪　東京　藤澤千枝子

冬常磐木

霜枯の村のはつれにさかひして目しるしなせり松の老木は　富山　關清次郎

冬木立

冬かれの木立の中を鴨の聲さむけにもなきわたる哉　三重　伊藤祐誠

木蔭をとしたひし夏は夢なれや今は木の葉も散りつくしけり　宮城　赤尾保子

枇杷

紅葉ちり菊はうつろふ山里の冬をかさりて枇杷の花さく

## 寒禽

ふる雪のいたく積りて峰白き山ふところにひえ鳥のなく　茨城　高木葵心

とけてねぬ世をやなくらん水鳥のとつる氷のせきの隔てに　三重　稲垣己三郎

御惠の深き御ほりに群りて吹雪もしらすかもの遊へる　群馬　小林文平

池の面のあしの枯葉の霜白くなく水鳥の聲そ身にしむ　長野　西野入久子

千曲川瀬の音寒き月かけにさえて聞ゆる水鳥の聲　長野　山岸庄三郎

ぬは玉の闇にからすのさわくなり木枯いかにねくらふくらむ　秋田　藤井重彬

稲かふに置く霜白き千町田の月にゑあさる鴨のひと群　茨城　飯田信



水草も流れて氷る里川のゐせきの杭にからすとまれる　奈良　薄木昇

さよふけて氷をむすふ池の面につま戀ふ鴛の聲あはれなり　千葉　荻野政藏

### 寒鳥啼月

月影の波に碎くるあら磯に聲をみたして千鳥啼くなり　静岡　佐野みつ子

霜こほる槇の葉こしに月みえて寒さ身にしむ雁の一聲　香川　佐野幸太郎

霜さえて月影凍る池水にうきねさひしと水鳥のなく　静岡　森井良太郎

### 冬禽

窓近き籠の小鳥のこほす餌にすゝめよりくる雪ふりの朝　兵庫　藤原象二

### 冬鳥

みそさゝいなく聲寒し雪雲の空をおほへる野路の夕くれ　福島　秋月ましこ

朝からす何をかあさる霜柱むきより高くたてる畠に　岡山　大塚義男

水鳥

はま川のあしの枯葉に霜おきて羽はたきさむし鴨の一群　大分　落合田鶴子

時雨ふる片山かけを夕からすぬれ羽寒けに一つとひゆく　静岡　菅沼愛子

池水鳥

年々に數こそまされ水鳥もなれたる池や住みよかるらむ　栃木　田村家壽子

枯木寒鴉

落葉かく人は歸りて夕からす聲寒けなりうふすなの森　宮城　菊田千代乃

雪中鳥

荒鷲のかゝなく聲のものすごく吹雪そしまく越の山道　鹿兒島　小田豐武

峰の雪つもるさむさの夕暮にきくも淋しき鳥の聲かな　岩手　市野川素溫



千鳥

風すさぶ須磨の浦和の小夜千鳥こゑにむかしのしのはるゝ哉　神奈川　尾上桑次郎

磯山に月かたぶきてひくしほの浪路をくらく千鳥なくなり　宮城　笠原良保

夕波の月の出汐の磯千鳥浦風寒みこゑそみたるゝ　茨城　堀川倉四郎

風早の三保の松原しも冴えて更けゆく月に千鳥なくなり　東京　吉村重子

聞千鳥

曉の汐みちくらん有明のはま邊つたひに千鳥なくなり　岡山　木口信蔭

名所千鳥

たそかれて空もやうやく薄墨の繪嶋か磯に千鳥なくなり　埼玉　桑田良隆

磯千鳥

磯崎の眞砂路白く霜さえて寒き月夜に千鳥なくなり　岡山　室多美子

寒夜千鳥

二見かた月のてしほの空さむく白子をかけて千鳥なくなり　三重　中島春花

月前千鳥

てる月のかけの寒けき里川によたゝ千鳥の聲のきこゆる　宮崎　時任正張

野禽

日の光りさむき廣野の冬かれのあし原すゝめむれてとひたつ　秋田　大井永信

冬野小鳥

奥山に雪やふりけん珍らしき小鳥野にきて餌をあさる見ゆ　兵庫　眞垣庠之助

冬

鳥の聲松の嵐も音たえて山靜かなる雪の夕くれ　茨城　金戸文雄

鴨

雪ふかみ物音たえし山里のしつけさやふる鴨のこゑ　千葉　長嶋くに子

池のをしとり

狩人の火銃許さぬため池はをしのともねも安けかるらん　山口　池田總子



鴛鴦

池のもにむすふ氷を夜床にてをしはさむけき夢や見るらむ　三重　大川親直

寒牡丹

水仙の霜に折れふす我庭に冬こもりして牡丹花さく　同　三浦つる子

霜除の下に花さくふかみくさ冬の寒さもしらすかほなる　岡山　周藤政太

かくれみのきて冬こもるほうたんはめかれし庭の主なりけり　東京　小澤玉子

かこひ藁雪に埋むる冬の日に花なつかしき深見草かな　三重　阪野嘉一

くれなゐの牡丹一もとさきいてゝあかるくなりぬ霜枯の庭　福岡　中尾林藏

冬梅

降る雪に冬こもりして我庭の老木の梅は春をまつらん　福島　金澤六郎

早　梅

冬もなほ雪見ぬ里の日たまりにほころひそむる梅の初はな　神奈川　西　久子

冬枯の淋しき庭にほころひてまたき春めく梅の初はな　東京　山崎翠葉

田家早梅

もみをすり米をしらくる賑ひに梅も冬さく小田のいほ哉　愛媛　岡田賢次郎

瓶　梅

つむ雪にとさせる庵も春めきぬ小瓶の梅の花ささしより　富山　關清次郎

蘆　花

浦人の刈り残したる冬枯のあしのほわたの雪と散りしく　長野　飯沼準一郎

茶　花

冬のきて庭の木の葉のちりゆくを瓶にさす茶の花そなつかし　山口　齋藤鶴平

垣越しに雪をいたゝく山見えて枯ゆく庭に茶の花のさく　富山　田口俵太郎

冬　花

冬枯の庭を飾りて山茶花の咲く朝とての風寒きかな　宮城　荒祐次郎

あさ霜はふかくおけとも我庭のはひりにたてる枇杷の花さく　石川　北浦一郎

冬　木

曠原の枯木の梢とかりたちいこふ小鳥の一羽たになし　布哇　丸谷秀岳

冬　舟

舟こきてのりとる人は吹きすさふ冬の寒さもいとはさりけり　神奈川　石井豐永

のりすてし岸の小舟に雪ふりて川風寒くこかもむれとふ　愛知　安井信次

渡し舟岸につなきて旅人の姿も見えす吹雪する日は　奈良　葛城千種

吹きすさふ木枯の風帆にうけて冬の夕に歸るつり舟　岐阜　山田敦子

帆柱に松かさりしてとまり舟年をむかふるすみたかは哉　神奈川　佐藤貞雄

くたり來る小舟の棹のしつくまて凍るはかりに寒きかはつら　大阪　人見常次郎

朝からすなく聲さむし里川につなく小舟は霜白くして　神奈川　鈴木知惠子

水上は雪ふりつらむ木曾川をくたる小舟のとま眞白なり　三重　伊藤美の子

たかとのは冬をよそなる御茶の水寒さをのせてとま舟のゆく　東京　清水忠長

冬枯のかはら淋しき渡し舟ぬしまち顔につなかれてあり　長野　佐々木一衛

風さゆる冬の荒波押切りて港入りする漁舟かな　北海道　野邊悅伴



夕まくれ歸る小舟の帆つなにも冬の嵐のみえてさむけき　山口　西村右策

米つみてくたす川舟寒けなり俵に白く雪のかゝりて　富山　荒木諒雄

冬舟人

きたへつる身には吹雪も物かはと毛脛あらはに舟人のこき行く　靜岡　永田摠太郎

歳暮近し

えひすこのふな賣る聲をけさきゝぬ年の終りも近つきぬらし　宮城　山田さと子

煤拂

世離れし賤かふせ屋も師走には煤はらひして年を迎ふる　鹿兒島　早田怒平

歳暮

なほさりに過きし月日の積りきてとゝめもあへす年はいぬめり　奈良　吉村源甫

松竹とさけふ翁の聲きけはいとまある身も心いそかし　茨城　豐田芙雄子

歳暮夕

夢のまに月日つもりて一年を心ともなく過しつるかな　青森　宇野要七

殘りなく柱こよみもめくられて今宵に迫る年のくれ哉　兵庫　大西たつ子

夕餉たくかまと賑し年の暮もちひ切る人しめかさる人　三重　増田もとへ

歳暮懐舊

夜をこめて子の衣ぬひし若き日を忍ひなからに送る年哉　大阪　殿村たけ子

歳暮述懐

つとむへき事をつとめてゆく歳を心のとかに送るうれしさ　千葉　飯田辰三郎

歳暮言志

年老いし我に望はなけれとも子のゆく末そなほ思はるゝ　同　羽生長七郎

忘年會

くれてゆく年を忘れてつとひ來る人の笑顔を見るも嬉しさ　茨城　池水浩光

語るあり唄ふもありてとり〳〵に年忘れする集ひたのしき　鹿兒島　四木道邦

除夜鐘

くれてゆくつこもりの夜の鐘きけは我世のつまる心地こそすれ　東京　野邊地慶治

除夜燈火

はれきぬふ母の手せはし年も早今宵はかりの燈火のもと　同　角田傳

歳暮人

暮れてゆく年をさなから追ふに似て忙しけなり人の足とり　福岡　三輪則一

歳暮車

おもふとち年忘れして歸るさの心も輕くのる車かな　三重　山川薫三

新年

新玉の年の始はあめつちも物新しき心地こそすれ　山口　池田總子

ふり積る雪に初日の影さして豐年しるき君かみ代かな　茨城　柏崎やす子

## 越年

苦しみをしはし旅路に遁れつゝ年の瀬をこす神まうて哉　福岡　由比顯次

離島新年　鹿兒島　伊集院省三

くり舟に松飾りしてはた織の子等と年ほく久米の島人　山形　古家才次郎

昭和九年の新年を迎へて

日の皇子の御あれことほく聲のうちに年迎へけりみ民我等は　兵庫　若井きみ子

新年朝

朝毎に向ふ鏡も新しきとしたつ今日は晴れやかに見ゆ　大分　大島重雄

新年道

新しき年の晴着をきかざりて都大路に人の花さく　鹿兒島　蕨野盛夫

新年友

常ならぬ時に立つへく思ふとち屠蘇くみなから語る樂しさ　東京　藤澤千枝子

新年生花

心こめし年の祝ひの生花の梅はうれしくさきいてにけり



新年祝

高ひかる御子あれまして大御代のたくひまれなる年立にけり　福岡　友清耕吉

新年夢

羽子板をいたきて寢ぬる少女子の見る初夢や樂しかるらむ　千葉　飯田辰三郎

新年感

老たれとすこやかにして新玉の年の光りにあふそうれしき　福岡　古川松太郎

新年道

門松のみとりの浪に日のみ旗たちつらなれる大路にきはし　高知　津野貞猪

新年山

たちかへる年の始は見なれたる山の姿もあらたなりけり　兵庫　浪方靜一郎

新年風

新しくしめ繩ひきし門松にけさは神代の風のそよける　山口　波多野つた子

新年天

新玉の年の初日のかゝやきて空にも御代の光りみなきる　新潟　太田治之

屠蘇

去年の日の悔はかりなる思ひ出に甘きとそさへ苦き心地す　大阪　石井秀子

若水

ふる雨ににこりもやらぬはしり井の清きを汲める年の若水　長野　北原順一

試筆

とりそむる筆の命毛なかかれといのりつゝかく年のほきこと　愛媛　河野玄要

初日かけ昇るか如くすら〳〵と筆のはしらは嬉しからまし　群馬　森山英子

元旦の雨

豐なる御代のしるしと里人は年のあしたの雨をよろこふ　千葉　沼澤儀信

冬暖

牛おひて冬田たかやす人も見ゆつゝしの花のかへりさく村　千葉　一宮櫻村

あたゝかき冬の日さしに返りさく櫻も見ゆる逗子の磯村　東京　西山むら子



冬なから風寒からぬ磯やかた年の内より梅の花さく　同　小堀清子

暖かき冬の日さしに珍らしくをうなもいてゝ白髪ぬくなり　同　安原たか

里の子か嬉ふ雪もいまたみす今年の冬は暖くして　岡山　阿田楓舟

氷

松風は松にさわけとたつ波のあらぬを見れは池や氷りし　愛媛　佐藤久子

初氷

落穂あさる雀の足にくたけけり門田に結ふけさのうすらひ　愛知　角田ともゑ

薄氷

枯れあしの末葉に白く霜見えて利根の入江に結ふ薄氷　千葉　飯田辰三郎

まかねちの枕木白く霜見えて刈田にうすき氷はりたる　同　石井義三郎

氷初結

よへくみし井戸のつるへの殘り水けさは氷れり風寒くして　同　飯塚幸一郎

ぬかるみの道は凍りて足跡のかたちのまゝに結ふ薄氷　道氷　山口　吉富廣介

馬くるま通ふ道とはなりにけり諏訪の湖氷とさして　行路氷　岡山　秋山舜造

夜嵐にちりしいかきの紅葉はをうかへて氷るみたらしの水　社頭氷　大阪　田口このゑ

つのりゆく寒さしられて山蔭のかけひのたるひとくる日そ無　垂氷　佐賀　出雲侃

からすうり赤く實りてはたか木にかゝるも淋し霜枯の野へ　枯野　東京　秋元良子

八千草に蟲のすたきし面影の霜にやつるゝ冬の野邊かな　茨城　宮本松之助

夕されは木枯ふきて雲晴れて枯野さやかに照す月かな　同　菅沼初子

ときは木のみとり殘して廣野原みゆる限りは枯生なりけり　靜岡　五十嵐直喜

犬つれていさかりたてむ冬の野の雪に兎の足あとのあり　寒野　愛媛　石村清一

冬枯て見るへき色も奈須野原よあらしさえて狐なくなり　冬野　青森　松本勘吉

朝早くおきてかせけと冬の日の日あしは早し山蔭のいほ　冬日　兵庫　鈴木よね子

八千草も蟲の鳴く音も冬枯の野は朝毎に霜の花さく　野枯　東京　藤村篤子

のへは皆ふゆ枯はてゝ石佛みちのかたへに立つも淋しき　千葉　西周政次郎

初　冬

八千草はいつしか枯て朝な〳〵霜の花さく冬の山みち　静岡　清高彦

冬　湖

木からしに波うちさわぐみつ鳥のなく聲寒し鴉のうなはら　滋賀　伊藤保治郎

冬　朝

霜氷る山田のおもをさわきたつ鴨の羽音もさむき朝かな　三重　鬼島貞吉

つくはひの水は凍りて水仙の花の香さむし朝戸出の庭　鹿児島　宇都宗一

冬　朝日

白雲のつくりあけたる岩手山にほふ朝日のひかりまはゆし　岩手　藤澤秀泰

寒村驛にて

汽車いて〻雪のふりくる車よせ子を負ふをみな一人殘れる　岡山　竹内軍兵衛

冬　晴

こはるひや里のをのこはたぬきてあせあへ乍ら冬田打みゆ　千葉　高石精一



冬　山　家

木枯のたゝくにまかせ柴の戸をとざしてこもる冬の山里　山口　高崎きわ子

里にいつる道すら雪に埋もれて冬は淋しき山の一つ家　大分　安倍こま子

山里は冬こもりしてちり積る落葉に道は埋もれにけり　佐賀　牛島秀實

山　家　薪

粗朶落葉ひろひ集めて賤か家は煙ゆたかに冬こもりせり　愛知　村瀨市次郎

冬　山　里

きゝなれし松風さへもふる雪に埋れて淋し音たてぬ日は　東京　武富須美子

中空に月を殘して甲斐か根の雪より白む冬の山里　山梨　蘆澤直作

田家初冬

ひきすてし小田の鳴子の繩の上に初霜見えて冬は來にけり　福島　佐藤由之助

冬田家

雪積る小田の通ひ路足とめの高札を見る冬は來にけり　岩手　遠藤精晃

布哇の冬

草も木もきほひ弱りて常夏の島もこゝろの冬はあるらし　布哇　三池平三

寒草

時めきし秋はゆめのゝ女郎花霜にやつれし影の哀れさ　鹿兒島　落合藤一郎

百草の冬枯はてし我里にひとりのひゆく小山田の芹　靜岡　佐野やゑ子

炭竈

奥山の峰にたなひく白雲は炭やくかまの煙なるらむ　高知　片山德治

雪はれし山ふところに一すちの炭やく煙今日もたつみゆ　大分　高橋誠吉

冬籠

言の葉の花をさかせて冬こもる老の樂しみ人はしらしな　宮城　三上喜藏



初冬山

草も木もやゝ霜枯の野に山にしくれふりそふ冬は來にけり　福島　菊地守義

冬暮山

やせはてし冬の山々岩ねのみ表はにみせて日はくれにけり　神奈川　井上金治郎

冬遠峰

いつしかに雪の眺となりにけりみとりにはえしをちの高嶺は　岐阜　森田芳子

冬谷川

水にさへ冬枯見えて谷川の流れのすゑのほそりはてたる　東京　松浦英子

冬川

風寒き渡良瀬川のゆふあかり水に尾羽すりひたきとふみゆ　栃木　森森藏

冬海

わたの原潮風さむくふきあれてはなれ島根に波の花ちる　石川　近江政子

磯崎の松の夜嵐ふきしきてくたくる波の音の寒けさ　東京　岡村ちほ子

雪の山こほりの岩にあさらしの鳴く聲すてきからふとの海　宮城　戸田淑子

初冬聲

はりかへもまたせぬ窓のやれ紙に冬をさゝやくけさの北風　東京　渡邊幸子

山茶花

賤か家の垣根の日脚短くも冬きにけりと山茶花のさく　岩手　狩野鷹山

冬來

大原女のかしらにのする妻木にもおく霜みえて冬は來にけり　静岡　笹間貞子

埋火

ふみわけし昔しのひて白雪をゐなからに見る埋火のもと　京都　神服木之助

かしの身の一人火桶によりそひて歌思ふ夜は冬としもなし　愛媛　大塚和勝

歸りこん背子を待つ夜のふけゆきて霜おきそはるねやの埋火　大阪　谷川マツ子



炬燵

雪ふみて訪ひ來し冬のまれ人をまついさなひぬ室のこたつに　石川　森雅枝子

狩場

いさましく犬は狩場を走りきぬ雪にまみれし鳥をくわへて　福岡　園山尊篤

冬空

遠山に雪はつもれと大空はのとかに晴れて冬としもなし　東京　飯高宗子

冬雲

朝ほらけ寒さ一しほ加はりて空に雪けの雲そかゝれる　奈良　石橋亦夫

冬星

あふきみる光そ寒きとこしへに冬枯しらぬ星のはやしも　秋田　下遠重遠

冬人事

少女等も雪の比叡に事もなくのほりおりする世となりにけり　東京　石川宇兵衛

禁苑春近

天つ日の光たゝさすみそのふにもえて春待つ雪のした草　東京　弘田由巳子

春近　石川岸馨子

水はまたぬるみぞめぬとせゝらきのかすかにもらす春の私語

殘雁　茨城　布施正次

霜枯しあしのは白く月さえてかる野の池に雁のおちくる

寒雨　奈良　久保良祐

身に泌みてふる雨さむし傘をもつ手も凍るかと思ふはかりに

冬夜待友　滋賀　吉田虎之助

寒しとてちきりをたかふ友ならし更くるも待たむ埋火のもと

寒聲　兵庫　川村若松

渡し舟よふ聲さむし大川の堤ましろに雪の積りて

冬社頭　神奈川　中村榮之助

朝まだきはたし詣も見ゆるかなみたらし氷る神のみまへに

冬日暮　福岡　岸壽美雄

野路をゆく人寒けにも見ゆるかな木枯すさひ日蔭うすれて



冬夜話　茨城　鈴木虎雄

寒き夜にほた火かこみて大みけしぬかしゝ昔語り合ふ哉

殘紅葉　石川　渡邊とよ子

羽よわき小蝶も見えて山茶花の匂ふあたりに紅葉のこれり

冬筏　兵庫　小倉直子

奥山の寒さをのせて保津川を下すいかたの霜ましろなり

冬夕日　同　神村照子

はたか木にとまるからすの影寒く夕日かたむく野邊の細道

冬のまとゐ　靜岡　入交貞子

思ふとちろをかこみつゝ語る夜は寒さも身には障らさりけり

寒燈　福井　藤井敬貞

池水はなかは氷りて我庭の石のともし火かけさゆるなり

冬旅　北海道　森見作

窓をうつ霰の音にふる里の夢さまさるゝたひやかたかな

冬　澤

冬枯の野澤の水や凍るらむ寒く聞ゆる鴫のなくこゑ　同　關源右工門

木枯の風吹きあれて山澤をとひたつ鴫のかけのさむけさ　東京　早川蝶子

枯芦

よしきりのすたちし芦は霜枯て古巣あやふく川風のふく　宮城　澁谷鐘次郎

冬美人

雪の朝頭巾かむりて蛇の目さし道ゆく女浮世繪に似る　石川　野木愛子

寒き日に

雪ふりていとゝ寒き日もののふはたむろ守れり銃をになひて　群馬　金井源一郎

冬動物

身にしみる寒さにたへす埋火によりそふ猫は追はれさりけり　山形　大石幸七

冥

くつれこし高根の雲は夕くれてみそれとなりぬ山もとの里　岡山　苅田幾子



農園の冬

豆の飯大根ふろふき干しさなか夕餉たのしき冬の山里　岐阜　山岸田鶴子

冬水

車井のそこには冬やなかるらむくむ水ぬるし打けむりつゝ　東京　古田邦子

冬名所

あまき山雪そつもれるしゝ狩に大宮人のやかてきまさん　靜岡　是永錦子

待春

冬こもり樂しき事もあるものを春にならはといはぬ日そなき　東京　種野信子

霰

裸木にさす月影はくもらねとつふての如く霰ふりくる　茨城　高木吉太郎

旗たてゝつはもの送るうまやちにふく風寒く霰たはしる　秋田　油川紫石

木の芽にる庵の松風たえにけり窓の竹むら霰ふりきて　大阪　山脇爲臣

いにしへのいくさ語りの夢さめて窓にたはしる霰をそきく　熊本　相賀春雄

かきくもり遠山おろし誘ひ來て落葉の上にふる霰かな　福島　船城利平次

北支那にほこを枕のますらをの夢おとろかしふる霰かな　滿洲　米山元

月前霰

もれいつる雲間の月の碎け散る光と見しはあられなりけり　兵庫　菅村武救

庭のあられ

吹きすさふ赤城おろしのさわかしき音にましりてふる霰哉　群馬　石原春吉

みそれ

けさ見れは赤城の山の雪しろしょへの時雨やみそれなりけん　同　森山英子

焚火

子らか焚く落葉の火のこ朝風に軒より高くうつまきてとふ　東京　大町五城



# 雜之部

鳩

枝ゆつる道しるはとはみいくさの使ひはたすも人におくれす　東京　千葉胤明

雨後苔

あめあかりすへる足もとふみしめて苔の香めつる岩かけの道　同　鳥野幸次

山家煙

山すみの人の心もあらはれてますくにたてりいほの煙は　同　武島又次郎

髪

薄くなり白くなりゆく髪みてもわかよのふけし程そ知らるゝ　同　遠山英一

鏡

なさむこと多き此世に我影を若きにかへす鏡たゝほし　同　金子元臣

古社

旅人は道しるへふみひらきつゝ氷室の社のもりにたゝすむ　同　加藤義清

富士山

武藏野はにはとり遊ふ竹村のうへにも清く富士の山見ゆ　同　外山且正

皇居

東路の名所めくりあとにしてまつをろかまむ大宮ところ　大阪　堀良子

田人われ都の土のふみそめにまつをろかみぬすへらきの宮　岩手　坂上樹

千代田より仰けは高し九重の大宮所くもにそひえて　千葉　鈴木德次郎

宮城

大宮の千代の松影さやかにもうつるみほりに鴨のねふれる　富山　南喜作

大陽

世の中にいれられねる身も天つ日の惠みを受けぬ日はなかりけり　岡山　梶村よし江

朝日

あれまし〻みこをかしこみ國民の打ふる旗に朝日かゞやく　佐賀　小島井喜尾子



旭光照波

和田の原のぼる朝日の影さしてからくれなゐの波の花さく　栃木　濱中章七郎

能登の崎ほの見えそめて舞る日になこの浦曲の波そきらめく　富山　田口俵太郎

朝月

磯近くすくる白帆に松の影ほのかに落とす朝月夜かな　愛媛　岡田賢次郎

三日月

家鳩の聲のきこゆる大寺のいらかに高き三日月のかけ　東京　田中千秋

星

天つ空あまたの星も人に似て名を知らるゝは少なかりけり　熊本　出口市藏

星の名を習ひはしめて學ひ子か夜毎のほりぬ火のみやくらに　京都　福井とよ子

よひ〳〵に仰くみ空の星の影人にもましてしたしみのわく　石川　森川敏子

## 風

風の吹く向きこそ見ゆれ阿蘇かねの空にふきたす煙なひきて　熊本　内田乙女

ちきれ雲とひかふ空に片われの月も走れり風にむかひて　宮崎　山内泰三

風の日は蜑か小家も戸さされて内にはおうな淺蜊むき居る　千葉　沼澤義信

## 夜嵐

風こしの峰よりおろす夜嵐に庭木さわきてねむりかねつゝ　長野　佐々木一衛

ものすこき音のきこゆる夜嵐を夢にもしらて眠るうなゐら　大阪　人見常次郎

## 社頭の風

ぬかつけは吹くとしもなき朝風に靜かにゆるるみあかしの影　東京　丸尾初子

## 曉天

月かけは窓にかゝりて横雲のはたてに一ッ星のきらめく　同　春永達子



## 曉山雲

ひむかしの空は白みて高山にたなひく雲の美しきかな　宮城　國分義一郎

青海に雲のもすそをひきはへて峰より明くる北見冨士かな　北海道　野邊悅伴

## 曉雲

曉の山をはなるる白雲は神のあもらす心地こそすれ　福岡　宮崎眞樹子

## 朝雲

はりものゝ絹をかゝへて朝空の雲のゆききを仰く少女子　大阪　谷川マッ子

## 夜雲

月さへに急き足なりたゝならぬ雲のゆきかう夜半の大空　兵庫　佃幸子

## 山帶雲

雨とみし雲は流れて山の端にたなひきなから日はくれにけり　秋田　大井永信

松風に吹きみたされて切れ〳〵に峰にも尾にも雲のなかるる　大分　亀井増治

紅にはえこそわたれ海こしのまゆひく山の朝やけの雲　鹿児島　小田豐武

山吐雲

あそかねの煙と見しは谷間よりのぼりし雲の一むらにして　熊本　本田靜子

靜かなる山とは見えず湧きいつる雲の姿のおそろしくして　東京　中山榮太郎

わきいつる雲も迷へりきのふわか道に迷ひし山のあたりに　高知　長尾良博

空

里人の鍬の刃先にうつるなりコハルト色の空のかゝやき　長野　北原順一

雲

定めなき浮世の姿そのまゝにみ空にみせて雲の消えゆく　東京　鱗原泰全

雷

雨風の音ものすごき眞夜中に地ひゝきなしていかつちのなる　新潟　高橋悅子



故郷の雨

故郷の母のみ墓にたむけたる花をぬらしてふる小雨かな　長崎　森下初音

閑居雨

雨たりを硯に受けてつれ〳〵をなくさめなから文をかくかな　布哇島　吉澄保

夜の雨

みいくさの昔語にふくる夜の軒端さひしき雨の音かな　愛媛　大高藤枝

夕暮

心なき人の長ねにくるしみぬくりやせはしき夕暮のころ　群馬　伏島たき子

寶

日の本のほこるたからの一ッなり雲井にたかきふしの神山　愛媛　前谷初子

うちいりのかけや一ッも高輪の寺の寶となりてのこれる　東京　尾澤璋子

世に高きいさをのこせはかきすてし文さへ國の寶とそなる　高知　松永芳樹

世のためにこかねしろかね産いたす山こそ國の寶なりけれ　三重　伴　こと子

硯

ふつくゑの硯の海は淺けれと千ひろの思ひかきなかしけり　宮崎　戸高喜千藏

世の中にたえて硯のなかりせはいかて思をかきなかさまし　福岡　白井博之

琴

望まれておもはゆけにも少女子は調へ直して琴にむかひぬ　愛知　石原榮子

ラヂオ

亞米利加の歌も聞えてラヂオには國のへたてのなきそ嬉しき　千葉　木村重郷

都にてはやる小唄を山里にゐながらきくも樂し今の世　靜岡　飯田耕一郎

ゐながらに角力きく世となりにけり目の樂しみは耳に變りて　東京　角田傳

鈴

いつまても其名ふりせて鈴の屋の鈴の音高く世にひゝきけり　三重　横山宗顯

時計

時はかる器をみても心せようつりやすきは月日なりけり　東京　高橋佐十郎

友とへはいらへはなくて時計る針の音のみ高くきこゆる　同　石原禮子

劔

武士のやたけ心もこもるらむ研すましたる大刀のにほひに　栃木　森　森藏

とこしへに光を殘す武士の心のつるきたふとかりけり　岐阜　日下部酉子

しこくさをなきし劔のこほれ刃にたてし功のあとそ見えける　千葉　松原翁馬

寫眞

故郷の親のうつしゑとりいて丶見れは懐し物は言はねと　山形　大山太次郎

木　材

花も實もなくて年へし深山木はきられて後そもてはやさるゝ　島根　長崎仁子

自動車

土煙たつとみしまに松青き磯をめくりて車きえゆく　兵庫　鎌谷又三

杖

つまつかぬたつきとはせむ亡き父のみてあか殘る杖を力に　廣島　田村ため子

桶

あかをくむ桶に七草さしそへて軒におきたり山の尼てら　宮城　早川京子

鏡

くもりなき鏡の如く朝夕に向ふ心もみかきてしかな　宮崎　濱田なほ子

朝夕に鏡にむかひ思ふかな心のくもりありやなきやと　宮城　内馬場文彌

籠

軒はにには目白の籠をつるしおきて翁背をほす縁の日あたり　愛媛　小野國三郎

筆

心して筆はとるへし書く文字にその人柄も見ゆるなりけり　長野　細田豪輿

書　筆

ことのはに表しかたき姿をもさやかに見するこのふふてかな　愛知　渡邊勘一郎

舟

ふたくみの筆も及はぬ濱名湖の波間にかゝるあまのつり舟　靜岡　荒川常則

俵

米俵つみかさねおく大藏のとひら開きて世を救はなむ　奈良　上田正俊

柱

百ちゝの寶ありともいかにせむ家の柱となる子なき身は　靜岡　大塚近子

日傘

美しく波にうつれり江の島のいたはし渡る人の繪日傘　同　同

手紙

戰にかちし我子のしらせ文おしいたゝきて神にさゝけぬ　大阪　山脇爲臣

軍　馬

せめとりし仇のとりてに日の御旗高くあかりて馬のいなゝく　東京　清水繁子

皇軍に駒もめされて武士と一ッ心にいさみたつらむ　京都　大前壽夫

いさましく駒もいなゝく朝ぼたき戰ならしの砲の音して　兵庫　若井きみ子

武士か軍の場にのる駒のひつめにあかる土煙かな　島根　渡部周太郎

馬

のりならす人教へすは千里ゆく馬もかひなき世をやなけかむ　千葉　稲垣治

己か身のつかれ忘れていくさ人馬を愛する心うつくし　同　長谷川泰治

駒

ともすれはたつなとる手のゆるむかな心の駒にむちは打てとも　京都　大山春見

競　馬

かけぬきて勝ち得し駒のいきほひに見る人聲もとよみ渡りぬ　福岡　梅田八重子

廄　馬

廄馬をいたはりなからなりはひに人もつかれて歸る夕暮　大分　芥川澄子

牛

わか飼へるあめ色牛はおいたれと重荷を負ひて千里ゆくなり　佐賀　南里虎生

牛　車

夕日かけこすゑをくたる並木道いそくともなき牛車ゆく　三重　成田三郎

犬

にくしとは思ひなからも我前に尾をふる犬は打れさりけり　神奈川　馬渡增子

飼犬のけたゝましくもほえにけりあやしき者や門に來にけむ　兵庫　野口喜能惠

狼

きくたにも身の毛そよたつ山深み檜原のおくの狼の聲　千葉　岩岡清平

山色連天

なにはすの煙の末の空晴れてまゆゆく生駒うるはしきかな　大阪　寒川文平

河水清

五十鈴川きよき流れは口よりも心をあらふところなりけり　愛知　山本修

清流

さゝかにの蜘手にひきて都人命とたのむ玉川の水　東京　木村牧

清流水

月山の雪けの水やましるらんそこまて清き最上川かな　山形　鈴木義之

清潭

さしひきの汐にまかせて上しもに水の流るゝくたら野の川　朝鮮　岡テフ子

清流

そゝりたついはほの影を寫しつゝ底まて清く澄める淵かな　新潟　高橋悅子

たきつせは玉とくたけて谷川のよとめる方の水清きかな　神奈川　藪田喜作



山川

危くも岩かとよけて筏士はたくみにくたす木曾の山川　愛知　石川たま子

水聲

丸木橋ゆするかことき音のして岩にさかまく谷川の水　長野　相澤彌太郎

閑居水聲

人訪はぬ山の奥なる我庵は岩もる水の聲はかりして　兵庫　浪方靜一郎

皇子御降誕

日の御子のあれます今日は數ならぬ老もうれしく涙こぼるゝ　秋田　菊池秀言

天宇受賣命

ことほきのほつゝの音のそれよりも人の心そとゝろき渡る　愛知　神田久吉

菅公

賑はしき天のうつめのみ神樂に常世の暗もあけそめにけり　岡山　木口信蔭

つくしかたほす由もなき濡衣をかつきて君は世を恨みけむ　三重　大川親直

楠　正行　　京都　中村藤風

たらちねの母の教のなかりせは花たちはなも世にかをらまし

乃木大將　　茨城郡　司篤則

武士の守りの神と仰れていよ〳〵たふとし乃木の一もと

廣瀨武夫　　奈良　大倉恭助

身をすて〳〵重きつとめを石ふねにのせて沈みし君そをゝしき

士　　秋田　諸井正明

家も身も君の爲にはかへりみぬ武士のふむ道そたふとき

男　　鹿兒島　種子田秀實

國のため彈をいたきて身と共に仇うちやふる大和ますらを

神　官　　千葉　石井義三郎

かりきぬにかむり正しくふりはへていて立つねぎの姿けたかし

親　　愛媛　岡田賢次郎

罪の子に親は泣きけりあやまちし教の道をかへり見すして



父　　東京　中頭晟剛

君の爲散れとをしへし櫻井に別れし父そ世の鏡なる

母となりて　　島根　伊豫つる子

力ある產聲ききて今日よりは母とよはるゝ身となりにけり

寡婦　　兵庫　町尾たつみ

あとけなき吾子の行末おもふ時わか責おもし夫のなき身は

故郷有母　　福岡　津崎田鶴子

よな〳〵の夢にも見えて故郷の母のおもかけそゝろ戀しも

老人　　同　中尾林藏

わか父も生きておはさはかゝらむと杖にすかれる翁をそ見る

友　　鹿兒島　松山資幸

心まて合ふは少し春秋のはなみ月見の友はあれとも

稚子　　廣島　重政清子

物はまたえ言はぬ稚子も名を呼へは乳房離してほゝ笑みにけり

子を思ふ　　靜岡　山本茂市

明日しらぬ身をは忘れて子の幸を願ふそ親の誠なりける

看護婦　　奈良　植山儀吉

いたつきを忘れて笑ふ折もありみとる少女の心つくしに

花嫁　　神奈川　林せき子

草深きひなの少女も嫁きゆく晴れの姿は人目引くなり

少女　　兵庫　小野蓮子

あまかやにみなれぬ少女起き伏すは都あたりの里子なるらん

人影　　三重　中島春花

ふえふきて並木松原ゆく人の影こそみゆれ月きよき夜に

孫　　愛媛　二宮泰子

かた言の聲きくたにも嬉しきに老ゆく我をしたふ初孫

孫入學　　愛知　内田清

かたなりに歌ふ君か代これよりはリツムたかはぬ聲の聞かるゝ



軍人　　千葉　星越猪之助

我か國に仇なす者はおしなへてうたては止まぬ益良夫のとも

有閑人　　東京　板倉綾羽

おこなひの正しからぬか多きかな富みていとまのある女には

舞踊教師　　同　江崎一郎

踊り場の戀のステップふみはつし暗すみの恥世にさらしけり

行商　　埼玉　星野園香

道の邊に夕日をあひてはやり唄うたふあめうり姿さひしも

尼　　東京　掛川由起子

けはひして墨染きたる尼寺の尼にひとしき我身なるかも

伊勢參宮　　高知　野口元七

かへさには二見をとはむさくすゝの五十鈴の宮に詣て終らは

水の音も心きよむる一ツなりしはし見渡す宇治の神橋　　島根　堀亀五郎

伊勢詣てをへつと母の文は來ぬ二見か浦の繪葉書にして　岩手　坂上樹

宮居近くすむそうれしき伊勢參り思ひたつ日に思ひ叶ひて　三重　松島叶

交際

國と國まじはる道もなか〳〵にかけひき多き世とはなりにき　長野　相澤彌太郎

日に月に親しくなりぬゆくりなく歌くさりにて結ふゑにしは　東京　尾澤璋子

いたつらによそ目を飾る交りをほこる人ありあさましの世や　埼玉　星野園香

國愛國

東の海にねさして日の如くかゝやき渡る國そたふとき　岡山　大塚義男

草深き里よりいでゝ國のためつくしゝ人の力をそおもふ　山梨　新海信



國防獻金

飛行機を作るしろにと少女子もけはひをやめてこかね捧くる　福岡　塚原たよ子

すめくにを守る飛行機かすふゑぬ民の捧けしかねの力に　兵庫　小倉直子

國威揚

天か下に照りかゝやきぬ日の本のつよく正しき國の光りは　東京　小林富次

日の本の國のみいつは外國のねたみそねみの聲にこそ知れ　和歌山　田村和夫

さしのほる光さへきる雲もなし天か下照る朝日子のかげ　鹿兒島　菊地經文

まつろはぬあたも拂ひて萬代のいしすゑ堅しすめらみ國は　大分　藤永宣義

日本精神

うるはしや力あはせて外國のあなとりふせく大和心は　山口　紀藤織文

國防

ゆるぎなき國の柱をさらにまた守れ民草こゝろあはせて　新潟　久住喜久治

折にふれて

いへつとに兄の買ひ來し小田原のしその香嬉し朝け夕けに　東京　濱村梅子

人のため流しゝ汗は末遂にわか身うるほすいつみとそなる　山梨　小笠原淺次郎

老ぬれは高きよはひをほこるかな年をかくしゝ時もありしを　廣島　山下攝之助

くしけつる度に拔けくる髮の毛の白きかまして老し我かも　靜岡　武山春野

つはものゝつとめを終へて歸る子に小田の伏家も映ゆる今日哉　愛知　鈴木重久

いふものゝ口にまかせよ難波江のよしと惡とは神やしるらむ　山形　白崎良彌

よき噂さ耳に入る日のまれにして惡しき事のみ聽く浮世かな　大分　高橋誠吉

己か身の程を悟れはうき事も知らて世渡る心やすさよ　福岡　大塚速水

述懷

美しき人をうらやみねたみたる我愚かさに心はつかし　愛知　森川だい子

いかなれは正しき道をよそにして右に左に人のまよへる　茨城　吉見輝

歌の道ふみそめしより子たからのなき淋しさも忘れはてにき　熊本　稗方幸子

世の爲に何も殘さていたつらに土に返るか口惜しきかな　神奈川　宍戸與三郎

老人と言はるゝ事の何時となく耳にもたゝすなりにける哉　青森　松原季男

敷島の道遠くとも極めてむこゝろの駒に鞭を加へて　岩手　菊池萬陸

寄雲述懷

晴るゝかと見る間に雨とふり變り定めなき世に似たる雲哉　東京　清水忠長

照憲皇太后を悼む

ましゝ世の花のみ姿あふけとも玉のみ聲をきくよしそなき　同　小田毎子

俚　謠

大あらひ唄ひあけたる俚謠の調へはたかし磯の松風　茨城　林龍

民　謠

ひなひたる流行うたにはなか〳〵に心をうかつものそ多かる　東京　大浪安民

盆　踊

空つたふラチオの波にのりて來るわか故郷の唄もなつかし　宮城　塚本梅次郎

ひらけたる世にも懷し盆踊り昔なからの手ふりのこして　兵庫　村田くに子



路上所見

同し世の人なりなから道の邊にくつみかくしつゝ人みかゝする人　東京　川村むら子

國を守るをみなの群の眞白なるエプロン姿みるもいさまし　大阪　片山良到

言　葉

數々のなやみも今はうすらきぬ情こもれる友の言葉に　千葉　山田詠一

ことのはの花のかをりは世の人の心のかてとなりて殘らむ　富山　米林德次郎

責　自　在

重き責われにかゝれり大亞細亞國と國との手を結ふまて　兵庫　藤原象二

せ　ま　し

うたむしろ廣き家居もせまきまて道の友たち集ふ樂しさ　大分　中野綾子

山　ひ　こ

一人行けは谷間にひゝく山彦をたよるも淋し奥のほそ道　北海道　野邊悅伴

我宿　東京　掛川由起子

明けくれに母と二人の我宿は夜半の風にも心おかるゝ

白髪　同　同

千代までは祈らされとも母君のかしらに霜のおくそかなしき

足音　高知　片山德治

語るへき人もなき夜にゆくりなく開えて嬉し友の足音

心　愛知　竹腰品子

ともすれは事に迷ひて我か心暗くなりゆく日の多き哉

富を願ふ　靜岡　山本茂市

うつし世の黄金白金何かせむ心の富を願ふわれらは

願　宮城　上野華子

叶へれはまた新しきぬきことの絶えぬは人の習ひなるらむ

讀書　大阪　戸田熊子

をさな時學ひし文を垣こしに隣の子等の聲にきくかな

老らくも進みゆく世におくれしと書をひもとくことは忘れす　島根　三原泰吉

面白き歌をよみて

選まれて高きほまれの人の歌みれは見る程面白きかな　山形　鈴木義之

契　和歌山　森くす子

神かけて千代を結ひし契さへたかへ勝なるめをとありけり

遠村煙　兵庫　草野藤治

たちのぼる煙は空にたなひきて夕やみせまる川下のむら

立ちのぼる烟にそれと知られけりありまの山の奥の湯の里　同　市岡虎象

夕けたく煙なひきて山もとの里の一つや暮れはてにけり　岡山　四十塚圓十郎

田家煙　福島　船城利平次

足らさるを足る事にして朝な夕な煙たつらむ小田の伏庵

田家夕　山口　末田三枝

夕烟たつ方さして田人等か牛ひきかへる里の中道

田家夜　千葉　鎌形治夫

となりとち風呂の使の聲すなり灯かけかそけき田子の家村

田家　秋田　今井樑

田に畑にいそしむ家の鍬鎌は黄金にまさるたからなりけり

古寺夕　島根　丹生谷雪子

石文も苔に埋れし山寺のゆふへ淋しきみあかしのかけ

都寺　東京　藤村篤子

たそかれの野こえ山こえひゝくなり奈良の都の古寺のかね

旅　高知　松永芳樹

海遠く渡る旅にて日のみはたかゝけし船に逢ふそうれしき

幼子や待ちわふらんと思ふにも道いそかるゝ日歸りの旅　福岡　津崎田鶴子



海　鹿兒島　本田親清

大舟もすゝみかねてそ見えにける荒波すさふ佐多の海原

朝海　佐賀　出雲侃

浪枕ゆられ〳〵し舟ゑひもさめてうれしき朝なぎの海

熊野灘くまなくなきし朝ぼらけはるかの沖に鯨しほふく　兵庫　小島羊古

島かけもうらゝに晴て鳥舟のひきくとひかふ朝なぎの海　朝鮮　杉本一

見返れはみちくるしほにかくれけり今渡りこし磯の岩むら　三重　鬼島貞吉

暮潮　千葉　大橋喜知二

つき〳〵にほらの飛ふみゆ夕闇のせまる荒磯汐のみちきて　廣島　小田勝次

ひろまへに潮のみちきていつき島うかふ鳥居に夕日おちゆく

暮迫るはま邊に人の影たえてよするうしほの音そ淋しき　埼玉　星野園香

波

我か舟をひとゆすりして沖つ波小島の岩に白くくたけぬ　石川　山本嫩子

ちりあくた磯にうちあけ歸りゆく波の心の美しき哉　三重　玉崎光起

島　波

島の子か磯つたひして貝拾ふ唄もくつるゝ波の音かな　大阪　石井秀子

海邊巖

磯傳ひかよふ近道潮みちて岩の上ゆく螢の學ひ子　愛知　鈴木重久

磯

夕汐やいまみちくらしいそさきの松のあかりね波洗ふみゆ　大分　百留宅子

磯　山

汐風に吹きさらされておもしろくなひく松あり磯の岩山　愛知　服部桂



磯　石

よる波の洗ひし磯のさゝれにはま玉とまがふ石もありけり　宮城　戸田淑子

江の島　江の島

江の島の山こえゆけは物賣りの女の聲の耳にうるさし　石川　池田美枝子

眞珠灣にて

人皆のおこりにふける世の中に荒波かつく海女のなりはひ　大阪　稲田穣

道

日の本の光りを四方にしき島の道こそ國のみちといふなれ　山形　白崎良彌

野　道

ふみそめし昔のおきてしをりにて靜かにゆかむ歌のなかみち　北海道　深谷由井子

朝風に馬も一聲いなゝきぬまくさかる野の歸り道にて　岩手　坂上樹

枝のこと行て分れておのつから迷ひ安きは野道なりけり　北海道　井上近藏

馬子の唄近くきこえて野中道かすみかくれに鈴の音する　静岡　井上たけい

都　道　愛知　山本萬太郎

都には人の多きをおもはせて土の下にも道そかよへる

小石たにあらぬ都の大路にてつまつく人の多き世なりき　東京　遠藤惣次郎

朝　山　三重　坂倉廣生

いつる日の光をうけて重なれる山こそ見ゆれ一つ〳〵に

曙　富士　兵庫　加藤新吾

天地のわかれしさまをうつし世に見せて明けゆくふしの神山

窓前山　山口　齋藤鶴平

朝夕のしたしみ深き窓の外の山を師となしまた友となし

故郷山　京都　平川三郎八

古里の山を思はぬ日はあらし都に住みて年はふれとも

鳥海山　山形　遠藤宗義

朝な夕な雲より高き鳥海山あふきて己か心とはせん

金華山　宮城　齋川まさ子

岩根うつなみも黄金の花とちるみちのく山に朝日匂へり

遠峰　秋田　土屋貞之助

飛行機の見えすなりゆく遠方の雲間にあはき峰そつらなる

見はるかす波路の末に一うねのうこかぬ雲は沖の山かも　鳥取　安江嘉千雄

山里　大阪　小山光子

水車めくる小川のにこらぬは浮世のちりに染ぬなりけり

山村　愛知　安田德篤

村の名と同し氏なる家はかりむつましく住む飛彈の高山

山上石　愛媛　森琴子

迷ひいりとふ人もなき山中にみいてて嬉し道しるへ石

庭　石

はなれ家は繁る木立にかくろひて奥庭ふかくつゝくとひ石　大阪　堀良子

陵　熊本　本田行藏

自ら衿を正しぬうねひ山みさゝき見ゆる汽車の内にて　山形　小野仁堂

桃山の神のみさゝきをろかみてみ歌かとさく松風のおと　神奈川　林せき子

松原

病もつ少女なるらむ淋しけに今日もたゝつむ磯の松原　奈良　南園眞誠

ほからかにみ空は晴れて朝日さす峰の松原からすとひかふ　茨城　飯田信

松

わか庭にひと本ほしき木ふりなり岩に根させる磯の老松　大分　落合田鶴子

枝をつく庭の老松こけむしてへにこし年やいくつなるらむ



社頭松

早鞆のめかりの宮の松か枝にをり〳〵かゝる浪の白ゆふ　福岡　生田仙松

海邊松

富士のねも雲居に晴れて渡つ海の波間に浮ふ三保の松原　東京　弘田由己子

老松

千代ふれと松の緑の色かへすかしこ所に立てる大樹は　福島　石川友亮

老杉

夕月を梢にかくる老杉の暗き木の間にかはほりのとふ　兵庫　松本阿喜子

並木

高き屋の立ちつらなりて丸の内並木もひきく見え渡るかな　東京　土肥孝子

木蔭

浪の音そよふく嵐櫓のひゝき清し靜けし磯の松かけ　島根　渡部周太郎

門

世の中に時めく人の門にしてことそきたるかゆかしかりけり　東京　武富須美子

生　垣　　福岡　伊東憲一

生ひいつる篠をそのまゝ垣にして山田の里そ世はやすけなる

向島懐古　　東京　江崎一郎

朝夕にたつ川霧を漕きわけて腕をならしゝ昔をそ思ふ

海女の息笛　　大阪　稲田穣

うちよする波のをちこち聞ゆなり貝とる海女のいきつきの笛

死　別　　東京　西浦のふ子

うつせみの世のならへとは云ひなから子に別るゝは悲かりけり

處　世　　同　同

いか許りけはしき浮世渡るとも誠の道をふみなたかへそ

客　來　　朝鮮　濱島義一

早々と人の訪ひ來ぬねすこして朝餉もすまぬ今日の休み日

洪水後　　同　同

わらくつの木の枝高くまつはりて凄さをかたる洪水のあと

短　日　　福岡　天野開作

暮れぬ間と思ひしものを夕つく日すへるか如く山に落ちたる

戰　死　　山形　遠藤宗義

唐國の野山に骨はさらすとも高きいさをは千代にのこらん

社頭の朝　　群馬　小林文平

兵に召さるゝあした村人に別れを告くる神のひろ前

病　後　　石川　野木愛子

くしけつる髪のかろきにわれ淋しまたいゑ果ぬいたつきの後

夜　話　　福岡　中牟田華山

旅路より歸りし主人中にしてみやけ話をきく夜樂しも

親　切　　岐阜　森田芳子

何事もわかことのこと助け合ふ里の人等の心うつくし

運動會　　鹿兒島　早田怒平

幼子かはしりくらへの遊ひにも大和心のみえて勇まし

送　別　　福岡　白井博之

別るゝもうれしかりけり志なりての後に遇ふと思へは

ある夕暮に　　大分　大島重雄

静かにも沈む夕日を見てそ祈る明日もこの世に事なかるへく

便　　宮城　吉田修子

手にとりてみれは思ひのいらたちぬ待つ人ならぬ人の便りに

縄　　長崎　横尾英延

夜叉のことあらふる者も縛るなり國の掟のひとすちの縄

眠　　千葉　長嶋くに子

ねむられぬ夜半には物を思ふかなわか行ひの上やいかにと

玉垣　　山梨　米倉正信

古を語りかほなり苔むして宮居をかこむ石の玉垣

愛兒の臨終　　同　同

父母に守られなから苦しみをすてゝ死に行く吾兒そ悲しき

御製を拜して　　愛媛　大高藤枝

大君の玉のみ言葉かしこみて千年の坂も我は越えてむ

歌會の席にて　　東京　永井高子

樂しみに來ては苦しむまとゐかな思ふ言葉のまとまらすして

落下傘　　東京　田中千秋

つり傘に命まかせてみ空より落つるをとめもある世なりけり

交通　　岩手　宮澤彌次郎

歩みゆく子等の危く見ゆるかな車のしけく通ふちまたは

賢　　山梨　中村是則

おのかしゝ事にはけみて世に立たは賢からさる者や無からむ

怒　　東京　遠藤惣次郎

あしひきの山をぬくてふ力さへをさへかたきは怒なりけり

酒　　石川　富永良

むら肝の心の中のひめ事も云はするものは酒にそありける

老の身の慰め草となりにけり夕餉にそはる竹の葉の露　　静岡　横山健吾

忍耐

いか許り苦しき事もむらさきの心をみかく砥石ならすや　　愛知　竹腰品子

怒

恥しと後にそ思ふともすれは怒る心を色にいたうして　　東京　石井擴

おもむろに我にかへりて思ふ哉怒れる時の心せまさを　　鹿児島　落合藤一郎

誠

いつはりの世に唯一つまさしきは親子の中の誠なりけり　　北海道　中原作太郎

勝

學ひやの庭にひゝきて勇しきつなひく子等の勝ときの聲　　岡山　小野光子

骨

さすらひの旅に年ふる我骨を埋めん里はいつこなるらむ　　福岡　永野己之吉



鷗

海幸をあらそふ海女の舟近く心静かにかもめうかへる　　愛知　諸角友平

むつかし

心して行けとつまつく人多く實にむつかしき世渡りの道　　福岡　辻光子

壁

年をへてすゝけたれとも名に高き繪そ殘りける寺の古壁　　宮城　早川京子

帆影

晝たくみのゑより美し夕映えの空につらなる沖の白帆は　　愛知　石黒みつ子

別れ行く友をのせたる船のほの影なか〳〵し沖つしらなみ　　群馬　井上嘉重郎

一まきの繪をくりのへて白帆かけ雲に入りまた雲をいてきぬ　　岐阜　坂倉仁五郎

引舟

のる人の心冷して引舟のつなそ切れたる富士の山川　　熊本　武藤かきは

船中籌

松浦潟沖の波風さわくらし海士の漁火またゝきてみゆ　臺灣　飯田實哉子

敷島烟草

心なきつかさの作る敷島は煙となりて消ゆるはかなさ　大阪　桑川仙魚

籠鳥

おとなへは人より先に鳥籠の九官鳥そいらへしにける　島根　丹生谷雪子

蜘蛛

朝ことに拂ひおとせとさゝかには所を變えてたへす網はる　千葉　岡野安藏

世の中のむさぼる人に似つる哉あみを張りつゝえ物まつくも　岩手　沼倉勇

夢

いつ方にくもはかくれし軒はには張りたる網の高く殘りて　山口　波多野つた子

ねやの戸はかたくとさせと思ひねの夢には人の見えもこそすれ　兵庫　藤井ちた子

幼くて顔もおぼえぬ亡き父に逢ひにし夢のさめて淋しき　東京　堤義勇

石炭

岩木たく煙は空にたなひきて國の榮ゆることそしらるゝ　岡山　間野尚明

縄

竹竿のたらぬを縄におきないて衣かけほす雨あかりかな　愛知　坂井田實弘

箱

にせものゝ繪卷ひめたる桐箱のことはり書は正しかりけり　東京　坂本要助

衣

新しき衣をまとひて少女子か出て行く姿母の見送る　鹿兒島　牧元竹次

瓶

嵐山みやけと變るはなつけのかめ面白しすやきなれとも　三重　岡玄道

笛

笛ふけは奈良のを鹿のよりくなり神代なからの習ひ守りて　兵庫　小野蓮子

乳母車　東京　宮坂武雄

子守歌きゝつゝねむる幼子の夢をのせゆく乳母車かな

川投網　奈良　植山儀吉

かはくまにひそみし鯉やかゝりけむ打し投網に手答のある

篩　愛媛　佐藤久子

訪れてまつうれしきは我友の今しはきたる門の篩目

古城　同　浦尾惟正

治まれる御代に殘りて諸人の遊ひの庭となれる城かな

古戰場　三重　福井太男

松風にとはゝや遠きをたけひの勇しかりし城のそのかみ

名所　静岡　永田摠太郎

みなと川昔しのはむかたもなし今はいらかのたちならひつゝ

白妙の砂に根さしゝ長濱に幾代經ぬらむ虹のまつはら　佐賀　平野良道



天橋立　奈良　西谷善彰

あまつかみ通ひましけむ道ならし空までつゝく天の橋立

炭火　兵庫　田村てう子

あたゝけき交り見せて裏長や炭火の種のやりとりをする

木の根　北海道　石田昌勝

きのふかも荒れし嵐しの跡みえて松は根こそきたふされてあり

砂　熊本　相賀春雄

裏つたひ人も通へはかりそめに親の名かくな砂の上には

青年團　富山　中川幸作

若人の夜を警ましむる鈴の音に眠りしつけき小山田の里

風呂　福島　邊見綾雄

新しく作りすゑたる檜風呂入り心地よし木の香かをりて

農業　富山　名苗織平

天つ日の恵みをうけて田人われ土に親しむ身こそやすけれ

湊　宮城　多田捨己

海の上と思はれぬかな下の關門司をつらぬる船のともし火

東京　京都　山本貞子

おほなゐのありし十年を夢にしていらか續けり都大路に

毛虫　宮城　國分義一郎

いつのまに毛虫食みけむ石楠花の葉末大方あをみうせたる

漁村　長野　飯沼準一郎

釣舟のかへりまちつゝ夕餉たく煙たゝよふあまか家村

灰　奈良　片山やす子

ものすごく阿蘇の大山火をふきて灰そふりくる熊本の町

思往事　山口　吉村まつ子

なき父のうゑしたちはな匂へとも昔かたらむ母はゐまさず

名譽　新潟　村田歌城

をしけなく黄金をまきて浮雲の空の名をたにねかふ人はも

管弦　兵庫　兒島弘能

かきならす琴に合せてふく笛の音もさえてきぬ夜のラチオは

裁判　同　川越陸子

親のためおかしゝ罪のさはきには涙そゝかぬ人なかりけり

望洋　新潟　久住喜久治

浦鹽の山すら見ゆる心地して晴れ渡りたる北の海原

惜　佐賀　中野萬龜子

現世の幸よりもなほ永久に世に殘すへき名こそほしけれ

水郷橋　茨城　橋本直人

大利根に影をうつしていたこより鹿島にかゝる神の大橋

斷巖　山形　田澤富子

あやふけにつはくろの巣の見ゆるかな荒磯さきの立きしの上

圖書祭　和歌山　片山昌一

我かもてる書の限りを祭らまし人にゆるさぬくらを開きて

敬神

うやまはぬ人こそなけれ日の本の國は家毎神をまつりて　岡山　楠見建太

萬歳

門にこし三河萬歳ふたりにて掛合うたのふしもめてたし　兵庫　永井次子

汗

おこたりし身の過ちをくゆる時ひたひに汗のにしむおもほゆ　山口　國廣八助

速

速かに見舞のくるそうれしかる近きほとりに火の出てしとき　千葉　羽生長七郎

潮のひくひかたの小蟹あし音にあはてふためき穴に逃けいる　千葉　北川善次郎

鳩

教ふれは千里の道も迷はすに文つかへして歸る鳩かな　東京　野村鹿子

使

碁かたきのほしき折しも使して友は戰ひいとみきにけり　岡山　甲賀新八

夕まくれ使にいてしわきもこの歸りはおそし道や迷ひし　奈良　西谷善彰

繪

たくひなき國の寶となりにけりいかるか寺の壁のふる繪は　同　吉田しか子

笑

拙しと笑はゝ笑へ吾か歌はたゝ眞心のあらわれにして　茨城　内田熊藏

鐘

旅なれぬ里のほそ道日は暮れてきくに淋しき山寺のかね　東京　蒔田よし子

曉

庭鳥の一聲ことに山のはの空ほの〳〵とあけわたりゆく　茨城　内川照司

老

去年まではふところてして歩きしを杖頼まるゝ老とこそなれ　佐賀　永田關三郎

恨

三原山たゝぬ煙はかすしれぬ人の恨みのほのほなるらむ　東京　藁科松伯

合　奏　　東京　齊田隆治

かしましくかなて合するものゝ音をこのむ若人多くなりぬる

野　球　　神奈川　藪田喜作

國々の若き人々つとひ來て手球なけあふ世となりにけり

むつかし　　高知　津野貞猪

人心けはしくなりて平かに治りかたき世とはなりぬる

心　　岡山　横畑圭邦

目に見えぬ人の心のよしあしもその行ひに表るゝかな

行ひにうつるを見れは人々の心にもなほかけはありけむ　　北海道　山下すみゑ

いかならむ事おこるとも驚かぬ大和心そをゝしかりける

社　　宮城　鈴木三郎

神さふる香取鹿島のみやしろはすめらみ國の鎮めなりけり　　千葉　鈴木德次郎



目　　岩手　沼倉勇

言の葉にいひえぬ折のひめ事を目にて知らする術はありけり

砲　聲　　兵庫　渡邊千榮子

雪深き山邊にえもの見いてけん狩犬ほえてつゝの音する

光　　京都　中村藤風

世にしるき人の譽れはみかきてし心の玉の光なりけり

大君の稜威かゝやく日の本は亞細亞をてらす光なりけり　　兵庫　山本小四郎

力　　三重　内田ひさの

のりあけし舟もうかひぬ滿潮のおのつからなる力頼りに

時　　東京　鈴木咲子

いたつらに過すそ惜しき黄金にもまさる寶の時としらすに

はたおり　　福岡　辻光子

鍬とりて小田をかへしゝ里少女今日は雨ふる窓にはたおる

浮沈　山口　藤村春香

うきしつみ何かはいはんかねてより波風荒き世を渡る身は

かたみ　東京　篠田時化雄

たらちねの形見の書に書き入れの見ゆるはことに懐しき哉

和歌　香川　佐野幸太郎

九重の雲の上までかしこくもきこえあくるは歌はかりにて

羨し　福岡　中島雄太郎

學ひやに通ふ子供ら羨し逝きしわか子の事を思へは

訛　東京　柴崎千枝子

この里の訛言葉もとりいれて出湯の便りかきおくりけり

名もしらぬ人にはあれとわか里の訛なつかし同し汽車にて　宮城　小林こきん

笑　三重　稲垣己三郎

面白き道化役者の身ふりみて老も思はすあこをときにき



偽　宮崎　竹井一郎

をり〳〵に偽る人の言の葉は誠の時もうたかはれけり

廣野原　朝鮮　岡野覺太郎

日を重ね行けともゆけとシヘリヤの廣き野原はつきんともせす

無言の凱旋　大阪　片山良到

河内野の田畑つゝきしする遠くなにはの城のそひえたつ見ゆ

朝清め　兵庫　増尾眞棹

勇しく門出おくりし武夫を今日は涙に迎へけるかな

殖林　茨城　長沼成美

幼子に箒とらする朝ことのさためも庭の教なりけり

法燈照未世　新潟　高橋悅子

村人等おのかとり〳〵木を植ゑて百年のちの富をはかるも

山口　横田榮忠

日の本の光とともに未の世をなほこそ照らせ法のともし火

散歩

兵庫　川村若松

さま〳〵の世のさま見えて面白し都大路のそゝろ歩きは

宮城　立花泰隣

その昔心つくし〻立花の今日この庭にかをるうれしさ

千葉　高石精一

朝

とりのねに明け渡り行くあめつちは何時の昔に開きたりけむ

群馬　井上重徳

水

まし水のまことの味は酔ゑさめと汗と戰ふ人のみそしる

茨城　長岡純一郎

年の始めに孫の生れければ

新玉の年のはしめに初孫をあけて春めく家の内かな

愛知　下司安吉

草

壁ぬらん代にと積みし荒土に名も無き草の早も生ひたり

福岡　岸壽美雄

孤島煙

わたの原はなれ小島の中にすら人や住むらむ煙立つみゆ



漁火

新潟　荆木かん子

磯やかた旅ねの夜のつれ〳〵にかそへてもみつ沖の漁火

青森　松原季男

火影映水

まき水に映るは涼しともし火の影はちまたの空をてかせと

宮城　荒祐次郎

山湖

嶺の雲ひろこりいて〻十和田湖の水の鏡はかたくもりせり

東京　藤崎虎二

水郷朝

はし渡る人は見えねと朝靄の中をこきゆく宇治の柴船

青森　駒嶺賢治

湖

ともすれは風ふきたちて底ひなき十和田の湖の波そすさまし

千葉　荻野政藏

鳥

大空を雄々しくかける鳥もなほすたちし松は忘れさるらむ

岡山　竹内軍兵衛

障子張

のりなむる子猫しかりて小法師か障子はりをり寺の廣えん

紙　千葉　筒井貞子

千早ふる神のみふたとなる紙は下にもおかす尊まれけり

農家　愛媛　佐藤義道

我國の榮のそまはおとろへし田人の家をまつおこさなん

曉鷄聲　岡山　内田久太郎

庭鳥の聲もさやかにあり明の月はねさめの窓をてらして

紀元節　福井　眞田一夫

けふことになほ幾千年祝ふらむとほき昔の國のはしめを

都闇夜　山口　高野政枝

赤青の灯かけは空にうつろひて都の闇夜うつくしき哉

千葉　小川縫子

なりはひの道をあさりてたもとひく辻君もあり闇の都は

奈良　稲田主麿

忘れても忘れかたきは大なへのありし都の闇夜なりけり



人影　大分　安倍こま子

後影見えすなるまてたゝすめり今日はつたひの吾か子送りて

山路　千葉　小川縫子

高ねまて車の道の開かれてのぼるにやすきをつくはの山

國際文化　宮城　菅野圓藏

とつ國の文の林のはなそへて大和にしきの匂ふ御代かな

吾子の滿洲に行くを送る　福島　石川友亮

招かれて滿洲國に行く身にも言葉の道はふみな忘れそ

育兒　佐賀　野崎斧雄

子を育つ鏡なりけりみたひまて住家うつしゝ親のまことは

廣むるといふことをよめる　奈良　植山儀吉

飢になくよほろもあるにほこらしく家居廣むる心なき人

悲しきもの　茨城　永長福美

十年あまり歌はよめとも歌らしき歌一つなし哀れわか身は

女のもとに　臺灣　久保一郎

見ねはかつ戀しさまして幾度か君か門邊をすきかてにせし

貴賤別なし　高知　近澤武男

へたてなく一つ社に祭られて田人わか子も國まもる神

櫻太招魂祭獻詠　靜岡　前田良平

國の爲つくす心は一つなり高きいやしきしなはあれとも

すみやすき世となりしより尙更ににえとなりたる人をしそ思ふ　櫻太　西村如松

鶴有遐齡　石川　藤本純吉

限りなき御代の長洲におり立ちて千代を重ぬる鶴の毛衣

光陰早し　愛知　竹腰品子

世渡りの苦しさしらて學ひやに通ひし事もはや昔なり

都戀し　同

母のます都そ戀し病める身を養はむとてひなに暮せは

長兄の金婚式にのそみて　山形　古家才次郎

うきつらき昔と過きて五十年もそひ來しいもせいとも芽出度し

經濟會議　東京　江崎一郎

テームスの河邊に集ひ水の月を掬はむとする四方のましら等

贈餅協議　群馬　未至麿大洲

惠まれぬ人に餅をめくまむとはかる心のうるはしき哉

癪に障る　島根　丹生谷雪子

斷れはなほつけ入りていか物を押賣りをするしこの商人

をりにふれて　東京　大町五城

神となる身にもくるしきことあらむわかまゝ禱る人多くして

續昭和集　終

昭和九年十月十七日　印刷
昭和九年十月三十日　發行

（定價金壹圓五十錢）

編輯兼發行者　大町壯
東京市赤坂區青山南町二丁目六十七番地

印刷者　五島林太郎
東京市中野區新井町三三六番地

印刷所　大日本歌道奬勵會印刷所
東京市中野區新井町三三六番地

發行所　大日本歌道奬勵會
東京市赤坂區青山南町二丁目六十七番地
振替　東京一二七六〇番

No. 26

終